

「元微之崔鶯鶯商調蝶戀花詞」 訳注 (上)

諸 田 龍 美

【解題】 「元微^び之崔鶯鶯商調蝶戀花詞」(以下「蝶戀花詞」と略称)は、北宋の文人・趙令時(一〇五一—一一三四)が、唐・元稹作の著名な伝奇小説『鶯鶯伝』の内容を、宋代の「鼓子詞」という説唱形式の文芸に置き換えたものであり、趙令時撰『侯鯖録』巻五に収録されている。「蝶戀花詞」は、唐代『鶯鶯伝』の恋愛故事が元雜劇の王実甫作『西廂記』として大成されるに至る、所謂「西廂故事」の演變史において、宋代を代表する重要な作品とされた。しかるに、日中を問わず、その専論と呼べる研究は極めてわずかであり、全体を網羅した訳注も存在しない。拙稿は、その欠を補うための一助として発表するものである。ただし、筆者は元來、中唐の文学を対象として研究をすすめてきた門外漢であって、おそらく多くの不備を免れ得ないものと思う。広く專家のご示教を賜れば幸いである。

趙令時(字は德麟、号は聊復翁・藏六居士)は、宋の太祖・趙匡胤の次男・德昭の玄孫(孫の孫)として生まれた。その伝記は、『宋史』巻二四四、『宋詩紀事』巻八五、『宋史新編』巻六一(宗室)、『宋元学案補遺』巻九九「蘇氏蜀学略補遺」などに見える。詳しい生平については、黄冬柏氏の「宋代西廂故事と蘇軾——趙令時「商調蝶戀花」をめぐって——」(『中国文学論集』第二十四号・一九九五年)を参照されたい。

原題にいう「元微之」とは、中唐の著名な文人・元稹(七七九—八三一)のこと。「微之」は、その字。元稹が

『鶯鶯伝』の著者であり、また、主人公の「張生」が元稹の仮託であるということは、(後者)に關しては異見があるにせよ) 今日でも有力な説となっているが、これは『侯鯖録』卷五に引く王銍ちの「伝記辨正」の考証によるところが大(2)きい。趙氏は、この王銍の説を受け入れて、敢えて、作品名を「張生」ではなく「元微之」としたものである。「崔鶯鶯」は、『鶯鶯伝』の女主人公の名。「商調」は、楽曲の名。該作は、先にも触れたように、鼓や管弦の伴奏を伴う説唱形式の文芸(鼓子詞)として享受された。「蝶恋花」は、詞牌の名。この詞牌を持つ作品が往々にして男女の恋愛をテーマとすることは、たとえば趙梅「唐宋詞中〈蝶〉的意象及其夢幻色彩」に詳しい。(3)

【注】

(1) 他に、『元祐党人伝』卷四、『元祐党籍碑姓名考』、『四庫提要弁証』にも記事を載せるというが、未見。

(2) 宋・太平興国八年(九八三)完成の『太平広記』(卷四八八・雜伝記五)では、既に『鶯鶯伝』を「元稹譚」としているが、王銍の詳細な考証がそれを決定付けたものと思しい。

(3) 『南京大学学报(社会科学版)』・一九九七年第三期。例えば「故詞中往往以蜂蝶喻示情郎、而鮮花則習比青春美貌的女子。男女歡愛、那自然可比之于胡蝶恋花了。詞中有〈蝶恋花〉的詞牌、詞人們常用以抒寫正值妙齡的少男少女之情愫、可為佐證。不容忽視的是、蝶所指代的情郎形象在詞中似乎總欠端嚴・專一」と。

【凡例】

一 「元微之崔鶯鶯商調蝶恋花詞」本文の底本には、現在もっとも流布し、かつ詳細な校勘もなされている『唐宋史料筆記叢刊』(孔凡礼点校、中華書局・二〇〇二年)所収本を用いた。

二 底本は、付載された孔凡礼氏の「点校説明」によれば、①清・鮑廷博の『知不足齋叢書』所収本を基礎とし、②

芸窗書院本、③『稗海』本、④明・鰲峯書院本、⑤清・『四庫全書』文淵閣影印本、⑥傳增湘『藏園羣書題記』卷七「盧抱經校旧鈔本侯鯖録跋」所引の清・盧文弨所藏寫本、⑦『永樂大典』卷二七四二、⑧涵芬樓本『說郛』卷三九によって校勘を施したものである。

三 二にあげた諸本の他に、⑨『叢書集成初編』文學類、⑩『筆記小説大觀』、⑪『全宋詞』にも本文を収めるが、これら①～⑪の諸本によって底本の文字を改めた場合には、逐一これを注記した。但し、②④⑥⑧の諸本については、訳注者は直接これを見ていない。

四 底本は、「伝曰」として、当該詞が対象とした『鶯鶯伝』の本文を付載している。これは趙令時の原作を踏襲する形式ではあるが、『鶯鶯伝』をほぼそのまま引用しているため煩を避けて省略し、(趙氏の引く)冒頭と末尾の句を提示して、該当する本文の範囲を示すにとどめた。

五 原作の詞には、四の『鶯鶯伝』本文に続けて「奉勞歌伴、再和前聲(歌伴を奉勞し、再び前声に和せ)」という指示が付されている。これは「伴奏者に演奏してもらい、再び前の曲調(商調)に合わせて(歌うように)」との指示かと思われるが、白文を示すのみにとどめた。

六 訳文は平明を旨とした。したがって、原文にはなくても、必要な場合には()を付して意味を補った。

七 本訳注は、二〇〇三年十月～二〇〇四年一月に行われた愛媛大学大学院での演習資料を基に、新たに諸田が浄書したものである。この間の演習には次の学生諸君が参加した。

浅川美香

倉本 亮

仙波京子

筒井智美

丸尾のり子

【序文】

夫傳奇者、唐元微之所述也、以不載於本集而出於小説、或疑其非是。今觀其詞、自非大手筆、孰能與於此。至今士大夫極談幽玄、訪奇述異、無不舉此以爲美話。至於倡優女子、皆能調說大略、惜乎不被之以音律、故不能播之聲樂、形之管絃、好事君子極飲肆歡之際、願欲一聽其說、或舉其末而忘其本、或紀其略而不及終其篇、此吾曹之所共恨者也。今於暇日、詳觀其文、略其煩褻、分之爲十章。每章之下、屬之以詞、或全摭其文、或止取其意、又別爲一曲、載之傳前、先叙前篇之義。調曰商調、曲名蝶戀花、句句言情、篇篇見意、奉勞歌伴、先定格調、後聽蕪詞。

夫れ伝奇なる者は、唐元微之の述ぶる所なり。本集に載せずして小説に出づるを以て、或其の是に非ざるを疑ふ。今其の詞を觀るに、大手筆に非ざるよりは、孰か能く此れに与からん。今に至るまで士大夫の幽玄を極談し、奇を訪ね異を述ぶるに、此れを挙げて以て美話と爲さざるはなし。倡優の女子に至りては、皆能く大略を調説す。惜しい乎此れを被ふに音律を以てせず、故に之を声樂に播し、之を管絃に形はず能はず。好事の君子極飲肆歡の際、一たび其の説を聴かんと願ひ欲するも、或は其の末を挙げて其の本を忘れ、或は其の略を紀して其の篇を終ふるに及ばず、此れ吾曹の共に恨む所の者なり。今暇日に、詳しく其の文を觀、其の煩褻を略し、之を分かちて十章と爲す。每章の下、之を屬るに詞を以てす。或は全て其の文を摭ひ、或は其の意を取るに止まる。又別に一曲を爲り、之を伝の前に載するは、先づ前篇の義を叙するなり。調は商調と曰ひ、曲名は蝶戀花、句句情を言ひ、篇篇意を見はず。歌伴を奉勞して、先に格調を定め、後に蕪詞を聴け。

【通釈】そもそも伝奇（『鶯鶯伝』）というのは、唐の元稹が記述したものである。（元稹の）本集に掲載されておらず小説集に出てくることを理由に、それ（『鶯鶯伝』が元稹作であること）を正しくないと疑う人もいる。（しかし）今その文章を観るに、偉大な書き手がこの作品に関与していることは間違いない。今でも士大夫が、微妙な（恋の）秘話を憚らず談じて、素晴らしい逸話や珍しい話を披露し合う時には、この（『鶯鶯伝』の）話を取り上げて素晴らしい話だと認めない者はいないのである。妓女たちに至っては、誰でもその大まかな粗筋を述べることができるほどだ。（ところが）残念なことに、音楽を考慮して作られてはいないので、その文辞を（そのまま）歌詞にして、音楽にのせて歌うことはできない。（そのため）ものずきな士大夫たちが、自由気ままな楽しい宴席の折に、『鶯鶯伝』の話聞きたいと願っても、ある妓女はその細部ばかりを取り上げて話の本筋を忘れたり、別な妓女は要点だけを憶えていて内容を最後まで述べるということができないというありさま。これは我々士大夫が皆遺憾に思っていることである。（そこで）今、暇のある日に、詳しく『鶯鶯伝』の文章を読み返して、そのごちゃごちゃした見苦しい箇所を省略し、全体を分轄して十章とした。章ごとの内容については、これを書き表すのに詞の形式を用いた。『鶯鶯伝』の表現をそのまま引用した章もあり、大意を取っただけの章もある。また、これらとは別に一章を作り『鶯鶯伝』（の文章）の前に置いたのは、あらかじめ（『鶯鶯伝』の）前半部分の主意を述べたものである。曲調は「商調」といい、曲名は「蝶恋花」。一句一句に感情を込め、一篇一篇に気持ちを表現した。伴奏者諸君に演奏していただいて、まず正しい音律を定めてから、その後で拙詞を聴くように。

【語釈】

〔伝奇〕…『鶯鶯伝』のこと。『鶯鶯伝』の異称としては『会真記』が知られているが、『類説』（南宋・曹澹編）所

収の『異聞集』（唐・陳翰編）では「伝奇」と称されている。『鶯鶯伝』の異称については、近藤春雄『唐代小説の研究』（昭和五年・笠間書院）第三章第一節の「題名の異同」及び「作者題名異同表」を参照。なお、普通名詞としての「伝奇」は、「潤色を含む小説的記録」の意。たとえば、明の胡応麟は、小説を志怪・伝奇・雑録・叢談・辨訂・箴規に分類し、「伝奇」については「飛燕・太真・崔鶯・霍玉の類、是れなり」（『少室山房筆叢』巻二九）という。「伝奇」の名称と内実については、近藤氏前掲書の第二章第一節「唐代伝奇の世界」に詳しい。

〔本集〕…元稹の本集『元氏長慶集』のこと。

〔而出於小説、或疑其非是〕…「小説」は、『鶯鶯伝』を「伝奇」と称していることから推せば、『異聞集』を指すか。

当時、『鶯鶯伝』は既に『太平広記』巻四八八（太平興国三年「九七八」完成）にも収録され「元稹撰」と注記されているが、なお作者を「張籍」だとする異見なども存した（『侯鯖録』巻五「辨伝奇鶯鶯事」冒頭部参照）。

〔極談〕…憚らずほしのままに談ずる。また、詳しく談ずる。たとえば、宋・范成大『呉船録』巻上に「初夜、月東嶺に出でて、松桂霜雪を蒙るが如し。諸人と欄に憑りて極談し、夜に至りて分散す」と。

〔幽玄〕…ここでは、プライベートな密事。秘め事。恋の逸話。

〔倡優女子〕…宴席に侍る妓女。芸妓。

〔調説〕…順に述べる。

〔吾曹〕…われわれ。私達。

〔煩褻〕…煩雑でなれなれしい。たとえば、柳宗元「唐の故万年令裴府君墓碣」に「会ま金州の猾吏来り、揚言恐喝

するに、煩褻の事を以てす。曰く、三十万を得ざれば、吾能く禍を為さんと」と。また、『宋書』卷十四・礼志一に「魏の文帝の詔に曰く、漢氏は日を東郊に拝さず、而して旦夕常に殿下の東面に於いて日を拝す、煩褻たること家人の事に似、天に事へ神を郊するの道に非ざるなり、と」と。

〔序〕…のべる(述)。順序・次第を追ってのべる。

〔前篇之義〕…王季思校注『集評校注 西廂記』(一九八七年・上海古籍出版社)・『西廂記鑑賞辞典』(一九九〇年・中国婦女出版社)は「全篇之義」に作る。ただし、どの版本に拠ったのかは記載がなく不明。諸本はみな「前篇之義」に作る。

〔商調〕…解題参照。

〔歌伴〕…伴奏者。本文の「之を管弦に形はす能はず」から推せば、鼓子詞の伴奏には、打楽器のほかに管弦楽器も使用されたらしい。葉徳均『戲曲小説叢考 下冊』(一九七九年・中華書局)「宋元明講唱文学」参照。

〔格調〕…歌の調子。格律声調。

〔蕪詞〕…蕪雑なことば。自己の文章に対する謙称。

【①】〔前篇之義〕

麗質仙娥生月殿。請向人間、未免凡情亂。宋玉牆東流美盼、亂花深處曾相見。密意濃歡方有便。不奈浮名旋遣、輕分散、最恨多才情太淺、等閑不念離人怨。

麗質の仙娥月殿に生まれ、人間に謫せられて、未だ凡情の乱すを免れず。宋玉牆東美盼を流し、亂花深處^{とらふすなわ}曾ち相

見る。密意濃飲方まぎに便有るに、浮名の旋遣いかんを奈ともせず、分散を軽んぜり。最も恨む多才情はなは太だ浅く、等閑に離人の怨みを念はざるを。

【通釈】麗しい天性の仙女は、月の宮殿に生まれたが、罪を得て人間世界に追放され、凡人と同じ恋の感情に心乱されるようになってしまった。宋玉のような美男・張生が垣根の東（にいる鶯鶯）へ恋の秋波を送り、花の咲き乱れる奥深い場所であつて二人は結ばれたのだ。濃密な恋の歡びが正にたけなわにあつた折しも、（張生は）世俗の名声のために（長安へと）旅立つ気持ちをどうすることもできず、離れ離れになることを重く受けとめなかつた。最も遺憾に思うのは、才能に恵まれた彼が恋の感情にはとても無理解であつたこと、なおざりに放置して、恋人と離れてくらす鶯鶯の、辛く切ない気持ちを思つてあげなかつたことだ。

【語釈】

〔麗質〕…うるはしい資質。漢・袁康『越絶書』卷九、外伝・計倪に「傾城傾国、思ひて昭あきつかに後王に示し、麗質治容、宜しく監を前史に求むべし」と。白居易「長恨歌」に「天生の麗質自ら棄て難く、一朝選ばれて君王の側かたわらに在り」と。

〔仙娥〕…仙女。また、仙女のような美人。唐・劉滄の「麻姑山を經」詩に「一たび仙娥碧落よに歸して自り、幾年か春雨に紅蘭を洗ふ」と。

〔謫向人間〕…「人間」は、人の世。俗界。『鶯鶯伝』に「神仙の徒かと疑ひ、人間より至れるを謂おもはず」と。『霍小玉伝』に「一仙人の謫せられて下界に至る有り」と。また「長恨歌」や陳鴻「長恨歌伝」における楊貴妃も、

仙界から「人間」に來臨した仙女とされる。

〔凡情〕…普通の人間が持つ情欲。恋の感情。南朝梁・陶弘景の『周氏冥通記』卷二に「劉夫人又子良に告げて曰く、夫れ神仙は玄に通ずと雖も、感徹するは則ち易し。但だ凡情は虚徴にして、其の感を招く能はざる耳」と。と。「仙界」を凡情のない世界、「人間」(下界)を凡情の世界として區別する発想は、たとえば『長恨歌伝』の仙女・楊貴妃の言葉「此の一念に由りて、又此に居ることを得ず。復た下界に墮ち、且つ後縁を結ばん」にもみえる。

〔宋玉牆東〕…「宋玉」は、戦国時代の詩人(前二九〇〜前二三三)。楚の人。屈原の弟子。「牆東」は、家の垣根の東側。『文選』卷十九、宋玉の「登徒子好色の賦」に「(宋)玉曰く、天下の佳人、楚国に若くは莫し。楚国の麗しき者、臣が里に若くは莫し。臣が里の美しき者、臣が東家の子に若くは莫し。…然れども此の女牆に登りて臣を窺ふこと三年なるも、今に至るまで未だ許さざるなり」と。

〔流美盼〕…色目をつかう。秋波を送る。ながし目。「美盼」は、白黒がはっきりした美しい目。『詩経』衛風・碩人に「巧笑倩たり兮、美目盼たり兮」とあり、毛伝に「盼とは、白黒分るるなり」と注する。「登徒子好色の賦」では、東隣の女性が宋玉に「色目をつかう」のだが、『鶯鶯伝』には「張曰く、余始め孩提より、性苟くも合はず。或は時に納綺閑居(着飾った娘と同席)するも、曾て流盼する莫し」とある。ここは「宋玉のような男・張生が、鶯鶯に流し目をつかった」と解しておく。

〔浮名〕…虚名。科擧合格の名誉や名声。

〔旋遣〕…めぐり、行かせる。

〔等閑〕…なござり。おろそか。

【②】『鶯鶯伝』の「余所善張君」から「終席而罷」まで）奉勞歌伴、再和前聲。

錦額重簾深幾許。繡履鸞彎、未省離朱戸。強出嬌羞都不語、絳綃頻掩酥胸素。黛淺愁生妝淡竚。怨絶情凝、不肯聊回顧。媚臉未勻新淚汚、梅英猶帶春朝露。

錦額重簾深きこと幾許、繡履鸞彎として、未だ省て朱戸を離れず。出づるを強ひられ嬌羞して都て語らず、絳綃もて頻りに掩ふ酥胸の素きを。黛は浅く愁ひを生じて妝淡く竚み、怨絶情凝、肯へて聊かも回顧せず。媚臉未だ勻はざるに新淚汚し、梅英の猶ほ春の朝露を帯びたるがごとし。

【通釈】華麗な門標と幾重ともしれぬ簾の奥の深窓で（育ち）、丸みを帯びた美しい縫い取り履（をはいた鶯鶯）は、これまで一度も豪華な閨を離れ（若者と会つ）たことなどなかった。無理矢理に（張生の前に）引き出されてもただ愛らしくはにかんで一言も語らず、あかい薄絹でしきりにその艶やかな白い胸を覆い隠すばかり。黛をうすく引き、愁いの浮かんだ顔に淡い化粧を施し（た鶯鶯は）その場に佇み、わきあがる怨みの情をじつところえて、少しも（張生を）かえりみようともしなかった。あでやかな頬は、まだちゃんと化粧もしていないのに流れ出る涙に早くも汚されている。（その姿はまるで）春の朝露を帯びた梅の花びらのよう。

【語釈】

〔錦額〕：門上又は檐頭などにかかげる豪華な題識。門標。次の「重簾」とともに、豪華で広大な邸宅を表す語。

『鶯鶯伝』に「崔氏の家、財産甚だ厚く、奴僕多し」と。

〔繡履〕：刺繡をほどこした美しいくつ。ここは、それを履いた美少女・鶯鶯を連想させる用法。白居易「楊柳枝二十韻詩」に「繡履嬌として行くこと緩かに、花筵笑ひて上ること遅し」と。くつが女性を連想させるのは、たとえば、白居易「感情」詩などを参照。

〔弯弯〕：弓なりに曲がるさま。

〔未省〕：「未曾」に同じ。白居易「春を尋ねて諸家の園林に題す」詩に「平生身の所を得たること、未だ省て而今に似ず」と。

〔朱戸〕：赤く塗った門戸。転じて、富貴の人の家。豪壮な邸宅のこと。

〔嬌羞〕：愛らしくはじらう。たとえば、権徳輿「玉台体十二首」詩・其の二に「嬋娟たる二八正に嬌羞、日暮相逢ふ南陌の頭」と。ちなみに、鶯鶯はこの時十七歳であった。

〔絳綃頻掩酥胸素〕：「絳綃」は、あかいうすぎぬ。「酥胸」は、ミルクのように潤った白い胸。「酥」は、牛や羊の乳を製精した飲料。乳酸飲料の類。あかい薄絹越しに見える白い胸の美しさは、たとえば、宋・李清照の「醜奴兒」詞にも「絳綃縷薄くして冰肌瑩き、雪膩酥香」と。

〔黛淺愁生〕：「生」字、底本は「黛淺愁紅」に作るが、「鶯鶯伝」には「常服醉容、新飾を加へず、垂鬢黛に接し、双臉紅を銷すのみ」とある。今、永楽大典本・芸窗書院本・稗海本・四庫全書本によって改める。

〔怨絶情凝〕：「鶯鶯伝」に「凝睇怨絶、其の体に勝へざる者の若し」と。似た表現として、「長恨歌」に「(仙界の楊貴妃は)情を含み睇を凝らして君王に謝す、一別音容 兩ながら渺茫」と。

〔媚臉〕：「臉」は、ほお。目の下、頬の上にある部分。

〔梅英猶帶春朝露〕：「長恨歌」に「(仙界の楊貴妃は)玉容寂寞として涙闌干、梨花一枝春雨を帯びたり」と。

ここは「長恨歌」の「梨花」を「鶯鶯（うぐいす）」に対応させて「梅英」としたもののか。

③『鶯鶯伝』の「張生自是惑之、願致其情」から「立綴春詞二首以授之」まで）奉勞歌伴、再和前聲。

懊惱嬌癡情未慣。不道看看、役得人腸斷。萬語千言都不管、蘭房跬步如天遠。廢寢忘食思想遍、頼有青鸞、不必凭魚雁。密寫香箋論繾綣、春詞一紙芳心亂。

懊惱せる嬌癡 情未だ慣れざるに、道らずも見る見る、人をして腸断役得しむ。万語千言 都て管せず、蘭房の跬歩 天の如く遠し。寝を廢し食を忘れて 思想遍く、頼ひに青鸞有り、必ずしも魚雁に凭らず。密かに香箋に写して繾綣を論ずれば、春詞一紙 芳心乱る。

【通釈】 悩み苦しむ美少女はまだ恋の情も解さないのに、はからずも一目会っただけで、張生をとりこにしてしまった。千言万語を費やしても彼女は見向きもせぬ（という）。美人の聞へはわずかに半歩、そのひと足が（張生には）天のように遠い。寝るをやめ食を忘れて思いめぐらす（のは、ただひたすらに鶯鶯のこと）。青い鳥（紅娘）が居てくれたのはさいわい、（便りをはこんでくれるのは）何も魚と雁とに限らない。（張生は）美しい便箋につる恋の想いのたけを密かに認め訴えて、「春詞」の恋文一通を送り、少女の心を乱（そうと）した。

【語釈】

〔嬌娘〕：美しく愛らしいむすめ。美少女。李賀の「唐兒の歌」に「東家の嬌娘 対値を求め、濃笑 空に画きて唐

字を作す」と。

〔人腸断〕：『鶯鶯伝』に「張生是より之（鶯鶯）に惑ひ、其の情を致さんことを願ふ」、また「鶯鶯と初めて遇つた）昨日一席の間、幾んど自ら持せず」と。

〔万語千言都不管〕：『鶯鶯伝』に「婢曰く、崔の貞慎自ら保つは、所尊と雖も非語を以て之を犯すべからず」と。

〔蘭房〕：女性の美しいねや。婦人の居室。『樂府詩集』卷四四、「子夜四時歌」秋歌十八首・其の七に「蘭房に妝飾を競ひ、綺帳に双情を待つ」と。また、『玉台新詠』卷八、南朝梁・劉孝綽の「淇上の人蕩子の婦に戯る 行事に示す」詩に「日闇くして人声静かなり、微歩して蘭房を出づ」と。

〔跬歩〕：ひとあし。半歩。至近距離をいう。『旧唐書』卷十、肅宗紀に「上行きて豊寧の南に至る……忽ち大風沙を飛ばし、跬歩の間、人物を辨せず」と。

〔廢寢忘食〕：一事に心を傾注して寢食を忘れること。「食」は「餐」の俗字。『鶯鶯伝』に「昨日一席の間、幾んど自ら持せず。数日来、行けば止まるを忘れ、食へば飽くを忘る」と。

〔青鸞〕：青鳥のこと。西王母のために食を取ったという三本足の鳥。便りをもたらす使者をいう。『山海經』卷十六、大荒西經に「西に王母の山有り（『太平御覽』卷九二八は「西王母の山有り」に作る）、……三青鳥有り、赤首黒目、……一名を青鳥と曰ふ」とあり、郭璞の注に「皆西王母の使ふ所なり」と。また、隋・薛道衡の「豫章行」に「願くは王母の三青鳥を作り、飛び去り飛び来りて消息を伝へんことを」と。

〔魚雁〕：手紙を運ぶ使者。『文選』卷二七、古樂府三首・其の一「飲馬長城窟行」に「客遠方より来り、我に双鯉魚を遺る。兒を呼びて鯉魚を煮しむれば、中に尺素の書有り」と。また、『漢書』卷五四、蘇武伝に「漢の使者を教て單于に謂ひて、天子上林中に射するに、雁を得、足に帛書の係る有りて、（蘇）武等某沢の中に在

りと言う、と言はしむ」と。「魚書」「鴈信」ともいう。

〔繾綣〕：情が深くいつまでも離れないこと。人を想う厚い気持ち。白居易の「元九に寄す」詩に「豈に是れ衣食を食らんや、君が心の繾綣に感ず」と。また、『鶯鶯伝』に「方に喜ぶ千年の会、俄に聞く五夜の窮まるを。留連時に恨み有り、繾綣意終へ難し」（元稹・続会真詩）と。

〔春詞〕：恋心を伝える艶詩。『鶯鶯伝』に「張大いに喜び立ちどころに春詞二首を綴りて以て之（紅娘）に授くと。

〔芳心乱〕：「芳心」は、女性の美しい心。また、美人の心情。李白「古風」詩、其の四九に「美人南国を出づ、灼灼たる芙蓉の姿。皓齒 終に発かず、芳心 空しく自ら持す」と。また、宋・歐陽脩「蝶恋花」詞二首・其の十一に「照影花を摘めば 花面に似たり、芳心只だ糸と共に乱を争ふ」と。『鶯鶯伝』に「君試みに為に情詩を諭して以て之を乱せ」と。

④ 『鶯鶯伝』の「是夕、紅娘復至」から「疑是玉人来」まで）奉勞歌伴、再和前聲。

庭院黄昏春雨霽。一縷深心、百種成牽繫。青鸞驚然來報喜。魚箋微諭相容意。待月西廂人不寐。簾影搖光、朱戶猶慵閉。花動拂牆紅萼墜、分明疑是情人至。

庭院黄昏 春雨霽れ、一縷の深心、百種 牽繫を成す。青鸞驚然として来りて喜びを報じ、魚箋 微かに諭る 相容るるの意。月を西廂に待ちて人寐ねず、簾影搖光、朱戸猶ほ閉づるに慵し。花動き牆を払ひて紅萼墜つ、分明なり疑ふらくは是れ情人の至れるか。

【通釈】中庭では日が暮れて春雨も上がり、(張生は、鶯鶯を)一途に深く想いながら千々に心乱れていた。(と、そこへ)手紙をはこぶ青い鳥・紅娘が急ぎ現れて嬉しい知らせを告げてくれた。(鶯鶯の)手紙を読めば婉曲に、あなたを受け容れますとのサイン。「西の廂で月を待ち、まだ眠らずに我おれば、簾を透けて揺れる月影、美しい圍の戸をなお閉じがてに開けおれば、花は動いて垣根をほらい赤い花びら地に落ちた。それではっきりわかったの、たぶん愛しいあの人があそこへたずねて来てくれた、と」。

【語釈】

〔庭院〕…中庭。垣根で囲われた住宅の内側。

〔春雨〕…春の雨。はるさめ。『鶯鶯伝』にはない「雨」を設定したのは、後出の「朝雲」「行雲」「朝又暮」(巫山の神女のご事)への布石。

〔一縷〕…一すじの糸。

〔牽繫〕…ひかれつながらる。気にかかる。北齊・顔之推の『顔氏家訓』養生に「人生まれて世に居れば、途に触れて牽繫せらる」と。「繫」は「繫」と同義。

〔青鸞〕…青鳥のこと。手紙を運ぶ使者。紅娘をいう。③の語釈を参照。

〔轟然〕…まっしぐらに進む。猛然。

〔魚箋〕…届けられた手紙。③の「魚鴈」の語釈を参照。

〔微諭〕…『鶯鶯伝』に「張も亦た微かに其の旨を諭る」と。

〔待月〕…月の出を待つ。以下は、『鶯鶯伝』で崔鶯鶯が詠じた「明月三五夜」詩の翻案。該詩に「月を待つ西廂の

下、風を迎へて戸半ば開く。塙を払つて花影動く、疑ふらくは是れ玉人の来るかと」と。

〔朱戸〕…赤く塗つた門戸。ここでは、鶯鶯の居室の扉。

〔分明〕…あきらか。はっきりわかる。

〔情人〕…恋人。『楽府詩集』巻四四、「子夜四時歌」秋歌十八首・其の二に「情人還臥せず、冶遊して明月に歩む」と。

【⑤】『鶯鶯伝』の「張亦微論其旨」から「由是絶望矣」まで）奉勞歌伴、再和前聲。

屈指幽期唯恐悞。恰到春宵、明月當三五。紅影壓牆花密處、花陰便是桃源路。不謂蘭誠金石固。斂袂怡聲、恣把多才數。惆悵空回誰共語、只應化作朝雲去。

幽期を屈指して唯だ悞つを恐れ、恰も到る春宵、明月三五に当たる。紅影牆を圧して花密なる処、花陰は便是れ桃源の路なり。謂はざりき蘭誠金石のごとく固く、袂を斂め怡声もて、恣まに多才を把りて數むとは。惆悵空しく回りに誰か共に語らん、只だ応に化して朝雲と作りて去るべし。

【通釈】逢い引きの日を指折り数えては、ただ（日時を）間違えぬかと恐れつつ、ついにその春の夜が訪れると、輝く月は正しく十五夜。（張生は）赤い花々が垣根を圧して密生する場所の、その花影が他ならぬ仙女（にも比すべき鶯鶯）の元へと我を導く（恋の）路だ（と勇んで彼女の屋敷にやって来たものの）、あにはからんや（鶯鶯が）蘭のごとき高潔な節操を、石や金属のように堅持して、居住まい正し可憐な声で、ほしいままに（張生の）輕薄才子ぶ

りを責め立てようとは。失意にくれ（た張生は）むなしく戻ってきたものの共に語る人となし。（神女のような鶯は）きつとかの「朝雲」となって立ち去ったのだ（と、張生は自ら恋の望みを絶ちきった）。

【語釈】

〔幽期〕：男女の密会。あいびき。唐・盧綸の「七夕詩」に「涼風 玉露を吹き、河漢 幽期有り」と。

〔春宵〕：春夜。「長恨歌」に「芙蓉の帳暖かにして春宵度る」と。

〔明月当三五〕：十五夜の明るい満月をいう。『文選』巻一九、「古詩十九首」其の十七に「三五明月満ち、四五蟾兔

（月）缺く」と。但し、『鶯鶯伝』では「既望（十六日）の夕、張因つて其の樹に梯して躡ゆ」とあつて、張生が鶯鶯の元へ忍び入ったのは十五夜ではなく、十六日の夜。

〔紅影庄牆花密処、花陰便是桃源路〕：『鶯鶯伝』に「崔の東に杏花一株有り、攀援して躡ゆべし。既望（十六日）の夕、張因つて其の樹に梯して躡ゆ。西廂に達すれば、則ち戸半ば開けり。……」と。これによれば、「花」は「杏花」。「桃源路」は、美女のすむ仙境へと通じる路。後漢の劉晨・阮肇が天台山で薬を採つて路に迷い、やがて桃源洞に入つて二人の仙女と遇つた故事（南朝宋・劉義慶『幽冥録』）に拠る。

〔蘭誠〕：蘭（香草）のように高潔で芳しいまごころ。女性の高潔な節操をいう。『鶯鶯伝』に「將に婢僕に寄せんとすれば、又其の真誠（私の本心）を発するを得ざるを懼る。……」と。

〔金石〕：かねと石。堅いものの喩え。例えば、『後漢書』巻十五、王常伝に「此の家下江に諸將を率ゐて漢室を輔翼し、心は金石の如く、真の忠臣なり」と。

〔欽袂〕：衣服の袖を整える。居住まいを正す。拝礼を行うための動作。例えば『史記』巻一二九、貨殖列伝に「故

に齊 天下に冠帯衣履し、海岱の間 袂を斂めて往きて朝す焉」と。

〔怡声〕…やわらかな声。『鶯鶯伝』に「崔已に陰に將に訣れんとするを知り、貌を恭しくし声を怡ばし、徐に張に謂ひて曰く……」と。

〔多才〕…王季思校注『集評校注 西廂記』（一九八七年・上海古籍出版社）・『西廂記鑑賞辞典』（一九九〇年・中国婦女出版社）は「多情」に作る。ただし、どの版本に拠ったのかは記載がなく不明。諸本はみな「多才」に作る。

〔数〕…（悪事を）数え上げて責める。このあたりは『鶯鶯伝』に「張生は且つ喜び且つ駭き、必ず済るを獲んと謂ふ（不謂）。崔至るに及び、則ち端服嚴容（斂袂）、大いに張を数めて曰く……奈何ぞ不令の婢に因りて、淫逸の詞を致す（多才）。……」とあるのを踏まえる。

〔惆悵〕…失望してなげき悲しむ。『鶯鶯伝』に「張自失する者之を久しくし、復た踰えて出で、是に於いて望を絶てり」と。

〔化朝雲去〕…巫山の神女が立ち去ったのち朝雲となった故事に拠る。『文選』卷十九、宋玉の「高唐の賦」の序に「昔者先王嘗て高唐に遊び、怠りて昼寝し、夢に一婦人を見る。曰く、妾は巫山の女なり。高唐の客と為る。

聞く君高唐に遊ぶと。願はくは枕席を薦めん、と。王因つて之を幸す。去るとき辞して曰く、妾は巫山の陽、高丘の阻に在り。且には朝雲と為り、暮には行雨と為りて、朝朝暮暮、陽台の下にあり、と」と。

【⑥】『鶯鶯伝』の「後數夕、張君臨軒獨寢」から「猶盤於茵席而已」まで）奉勞歌伴、再和前聲。

數夕孤眠如度歲。將謂今生、會合終無計。正是斷腸凝望際。雲心捧得嫦娥至。玉困花柔羞泣淚。端麗妖嬈、不與前時比。人去月斜疑夢寐。衣香猶在妝留臂。

數夕の孤眠 歳を度るが如し、將て謂ふ今生、會合終に計無からんと。正に是れ斷腸凝望の際、雲心捧げ得て嫦娥至れり。玉困花柔 羞ぢて涙を拭ひ、端麗と妖嬈、前時と比べられず。人去り月斜めにして夢寐なるかと疑ふも、衣香猶ほ在り 妝は臂に留まる。

【通釈】ひとり数夜を過ごすのもあたかも年を越すかのよう。これでは今のこの世では、もはや逢瀬の道は途絶えたものと、正に悲嘆に暮れながら（張生が）じっと遠くを眺めていた時、高い雲の中から（紅娘に）抱えられて、かの月仙・嫦娥（にも比すべき鶯鶯）がやって来たのだ。玉や花のごとく美しい彼女は悩ましげになよなよと、羞ぢらるいこぼれる涙をぬぐう。その妖しいなまめかしさは、先日的美しくもきっぱりとした姿とは、比べられない（変わりよう）。鶯鶯が立ち去り月も傾いた夜明け方、（張生は）契りは夢かと疑ったが、なおありありと衣服の香り、腕にのこりし彼女の化粧。

【語釈】

〔斷腸〕：腸が断ち切れるほどの想い。極度の悲しみや思慕の情をいう。李白の「清平調詞」其の二に「一枝の紅艷露 香を凝らす、雲雨巫山 枉しく斷腸」と。

〔凝望〕：遠くをじっと見つめる。例えば、南朝梁・江淹の「桐台に歩む」詩に「寂聴して空意を積み、凝望して長懷を信す」と。『數夕』から「凝望際」まで、『鶯鶯伝』には「數夕、張生は軒に臨んで独り寝ぬ」とのみある。〔雲心〕：雲の中。高い空。南朝梁・王訓の「同泰寺の浮図の詩に奉和す」詩に「重櫺 漢表を出で、層棋 雲心を冒す」と。また、『鶯鶯伝』に「緯節金母（西王母）に随ひ、雲心玉童に捧ぐ」（統会真詩）と。

〔捧得嬌娥至〕：「捧」は、両手で持つ。ささげる。「嬌娥」は、月にすむ女神の名。「姮娥」ともいう。もとは、弓の名手・羿の妻であったが、羿が西王母から手に入れた不死の薬を盗み飲んで、仙女となつて月宮に奔り、月の精になつたという（『淮南子』覽冥訓）。『鶯鶯伝』に「俄にして紅娘崔氏を捧げて至る」、「張生飄飄然として、且くは神仙の徒かと疑ひ、人間より至れるを謂はず」と。

〔拭涙〕：涙をぬぐう。『楚辞』九章「悲回風」に「孤子は唸じて涙を拭ひ兮 放子は出でて還らず」と。『鶯鶯伝』に「紅娘去るを促す。崔氏嬌啼宛転たり」と。

〔端麗〕：威厳があつて姿が美しい。『南史』卷二八、楮向伝に「楮向 風儀端麗にして、眉目画けるが如く、公庭にて列に就く毎に、衆の瞻望する所と為る」と。

〔妖嬈〕：美しくなまめかしい。魏・曹植の「感婚の賦」に「顧て妖嬈を懷ふ有り、用て首を搔きて屏宮」と。

〔不與前時比〕：『鶯鶯伝』に「至れば則ち嬌羞融冶、力支体を運ぶ能はず。曩時（以前）の端莊と、復た同じからず」と。

〔疑夢寐〕：「夢寐」は、夢をみながら寝ている間。こゝは、ねている間にみた夢。『鶯鶯伝』に「張生目を拭ひ危坐すること之を久しくして、猶ほ夢寐かと疑ふ」、「張生色を辨じて興き、自ら疑ひて曰く、豈に其れ夢ならん邪」と。

〔衣香猶在妝留臂〕…『鶯鶯伝』に「明くるに及んで靚れば、粧は臂に在り、香は衣に在り、涙光熒熒然として、猶ほ茵席に瑩く而已」、〔衣香 猶ほ麝を染め、枕膩 尚ほ紅を残す〕（続会真詩）と。

〔付記〕 本稿は平成十六年度科学研究費補助金（若手研究B）による研究成果の一部である。